

[退職教員特別寄稿]

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス

独自性としての「研究会文化」の醸成とその持続可能性

Keio University SFC-the Uniqueness of Its Culture of Research Laboratory
The Process of Fostering Its Own Culture and the Sustainability of the Culture Itself

長谷部 葉子

岡山理科大学教育学部教授

Yoko Hasebe

Professor, Faculty of Education, Okayama University of Science

Correspondence to: y-hasebe@ous.ac.jp

Abstract: 勤続 20 年の慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部の教員生活を振り返り、SFC の最も際立った特色の一つと思われる“研究会”の独自の「研究会文化」に焦点を当てる。しかし数多くある研究会の 2 つとない独自性の強い「研究会文化」について、そして担当教員退職後の研究会文化の持続可能性に関しては、今までほとんど議論されてこなかったように思われる。本稿は SFC の研究会の本質とその価値について議論するきっかけが生まれることを目的としている。

Tracing back 20 years of my career as a faculty member of Environment and Information Studies, one of the most outstanding characteristics of SFC is the original style of research laboratories, “Kenkyu-kai” which creates a unique culture of its own. We have seldom introduced and discussed its uniqueness and the sustainability of Kenkyu-kai culture even after the retirement of faculty members. My goal is that this opportunity will become a trigger to discuss the very essence and the value of “SFC Kenkyu-kai”.

Keywords: SFC 研究会、研究会組織の運営体制、研究会で醸成される研究会文化、担当教員退職後の研究会文化の持続可能性

SFC research laboratory, management systems of organizations of kenkyu-kais, uniqueness of kenkyu-kai cultures produced within each kenkyu-kai, sustainability of kenkyu-kai cultures after retirements of faculty members

1. SFC での勤続 20 年をカタチに残すー「研究会文化」の種づくりー

2004 年度から 2024 年度までの 20 年間、SFC での教員生活を振り返ると、言葉では表しきれない経験をさせていただきました。その後、定年退職をして、新たな大学教育機関である岡山理科大学教育学部にご縁をいただいて 1 年たち、ゆっくりと SFC を振り返り、何を選んでお伝えするか、考えあぐねました。その結果、SFC であったからこそ、作り上げることができた「独自の研究会文化」をこの場でカタチにして残すという結論に至りました。教員としての職務と独自の教育者としての在り方、独自の研究者としてのきめ探究心、敢えてリスクを取って獲得した自

由から生まれる「唯一無二の研究会文化」。この多種多様な研究会文化の独自性こそが、SFC の存在意義ではないかと考えます。

言葉を変えていえば、優れた研究者・教育者が多くいる中で、切磋琢磨して、定年退職まで SFC でご縁を持つということ、これは、人目を気にせずに、自らの判断で、その存在意義を証明し続け、定着させ、普及させてゆくことだと理解しています。ある意味で SFC の教員であるということとは、「大学とは」、「研究機関とは」という既成概念、固定概念にとらわれず、自らが判断し、学生の不利益を排除した、思う存分に「研究」に本気で妥協なく取り組む「苦しさ」と「楽しさ」を実学として学べる環境を創りあげ、提供す

ること。さらに勇気をもって独自の研究形態、独自路線に振り切ることであるという考えで現在に至っています。

35歳でSFCの環境情報学部に入學し、その当時は3年生から恩師の鈴木佑治先生の研究会に所属し、政策・メディア研究科修了まで、そしてその後のSFCの教員になる日までずっと鈴木先生にご指導を賜りました。

社会人として自分なりの実績を積み、手ごたえを持って、SFCに入學したものの、教育ビジネスと大学教育機関の「思考」及び「成果」に対する多様な価値観の違いに戸惑う毎日、社会人としてSFC生になったのは、大きな勘違いによる、人生における過ちであったのではないかと悩みました。周囲の大学院生や研究員の皆さんとの見据える価値観のズレに何度自ら撤退しようと考えたかわかりません。

今思うと、自我が強かったため、最初はSFCまだ初期の「君たちは未来からの留学生」という文化を、自分のイメージで勝手に打ち立て、120%それらしく振舞おうと勘違いしていたのです。そこに何かしらの「新しさ」を打ち立てようと力み、とがりきっていました。私は5期生でしたが、今でも鮮やかに思い出されるのが、入学当初4月に伊豆で開催されたフレッシュマンキャンプです。教員一人一人が担当するアドバイザーグループがあり、その担当教員の研究会生が教員とともに新入生を迎え入れる1泊2日のプログラムです。5期生は、SFCの1期生が卒業した最初の年の入学であるため、社会人になったばかりの1期生が自分たちの卒業後に入学した新入生に「喝」を入れて続々と仕事終わりに伊豆に集まってきました。

1期生の卒業生が、新入生一人一人にメンターのように付き、「SFCで何を実現したいのか」を問うていきました。新入生は一様に、「新しさ」を求め、何かと連発し、先輩である1期生が、その曖昧模糊とした「新しさ」を一つ一つつぶしていきました。つまりただただ全くの「新しさ」などというものは存在せず、考えるだけ無意味であると、それよりも「独自性」が何よりも重要で、それを打ち立て、普及させることがSFCのミッションであるということを1期生それぞれが熱を持って語り、初々しく挑みかかる新入生をことごとく、打倒していました。研究会毎に教員の専門領域の下で個々の学生が自らの「独自性」を打ち立て、極め、確固とした研究としてカタチにすることが何よりも求められていた、それを安易に「新しさ」と考えてはならないのだろうと、その当時は漠然と考えていました。

さて、時は流れ、自らが鈴木佑治先生、霜崎實先生、田中茂範先生に大学院で指導いただいた際、主査である鈴木先生が言われた一言が自らの教員人生を歩む大きなひと押しになりました。「長谷部さんの目指しているもの、頭の中で思い描いているものを、そっくりそのまま指導でき

る大学教員などはいない、自分も指導を担当できるのは、ごく一部だと思っている。だから、何も気にせず思い描いているものを、今確立されている研究領域を基盤として、勝手に自ら打ち立てなさい。」ずっと研究者としての王道を歩んでこられた鈴木先生のこの一言は、自分の躊躇する心を一掃し、吹っ切れた瞬間でした。なかなか自分の目指す研究領域でしっかりとかみ合うものに会うことがなく、自分の目指したいものに懐疑的になっていた時でした。

その後文学部の社会心理学の権威でいらっしゃる榎博文先生にもご指導をいただきました。お二人のご指導は、時には真っ向から対立する方向性を示すこともありましたが、自らの研究ですから、その2つの方向性からの指摘をどのように判断し、組み合わせ、先に進めるかは、当事者である自分がやるべきことと思い切って、自分なりに舵を取り続けた結果たどりついた現在です。

SFCにおいては、100以上の研究会の独自の専門性の上に、その研究組織独自の価値観、取り組み方、多様性が醸成され、それぞれが自由に規範に囚われない「研究環境、文化」を打ち立てています。また研究会によっては、入学当初の1年生であっても、自分の志が高く、研究会の承認を得られれば、大学院生と同じ場に所属し、早い時期から研鑽を積むことができます。これは非常に優れた制度であると考えています。学生によっては、学部3・4年生、大学院修士課程の2年間、合わせて4年分の研究環境を学部4年間で与えられ、自らの研究を極める環境があるということです。

2. 長谷部葉子研究会の「文化を醸成する研究会」としての取り組み

さて、前置きはここまでとして、本題に入ります。長谷部担当の研究会を取り上げ、「研究会文化」の醸成と普及、そして解散後の現在の状況までを共有させていただきます。その理由は、新たな教育機関にご縁を持ち振り返った際に、大学間の比較であるとか、良し悪しではなく、SFCの「研究会」という存在が如何に独自性が強いのかという気づきがあり、これこそ、この過去20年間の取り組みとしてまとめて皆さんと共有したいと考えたからです。そしてあくまでもこれは数多くある研究会の一事例にすぎず、環境情報学部、総合政策学部それぞれの学部において、学生の研究への強い探究心に基づいて、生まれた多様性を受容した結果の現状であり、それもこの1年で学生の探究心の方向性によっては大きく変化している可能性があるという前提に基づいていることをここにお断りしておきます。また今回は、参考資料は、敢えて研究会内及び関係者で作成あるいは執筆した参考資料・動画に限定し、フィールドワー

クという自らの経験とそこから生まれた理論の「実学」の一例としてご提示させていただきます。

ここで事例として自らの研究会を取り上げる前に、研究会概要をご紹介します。

【研究会テーマ】

「教育」から取り組むソーシャルトランスフォーメーションのカタチ地域との協働で構築する関係性のサステナビリティ

【概要】

教育やコミュニケーションに焦点を当て現場でのフィールドワークを通じ、実践しながら研究を進めていくゼミです。所属生は9つのプロジェクトと1つのコミュニティに分かれ、それぞれの分野や現場に応じた活動を行います。プロジェクト活動の中で、自身の問題意識を明確化し、個人研究に活かしていきます。—2024年度研究会シラバスからの抜粋

【長谷部研公認プロジェクト】

- ・オコメンプロジェクト：御所見地区における“米作り”
- ・Local Active-learning Project：長野県木曽町開田高原
- ・Glocal English Project：神奈川県藤沢市・首都圏
- ・羽後高校プロジェクト：秋田県羽後町
- ・八戸プロジェクト：青森県八戸市
- ・コンゴ民主共和国プロジェクト：コンゴ民主共和国首都キンシャサ市
- ・離島プロジェクト：鹿児島県屋久島町口永良部島地区
- ・ちびっこプロジェクト：神奈川県藤沢市
- ・Community Design Project：神奈川県藤沢市遠藤地区
- ・Order Made Community：個人プロジェクト

【研究会の特色・運営形態】

担当教員と学生が半学半教体制で、教員＋ゼミ長＋3名のSAでカリキュラムデザイン作成、運営を行う。学生主体発案＋教員の教育・研究意図での合意形成のMTGを毎週2時間実施：各学期の研究会テーマ・学期を通してのカリキュラムデザイン・毎週の授業のタイムライン作成・管理、毎週の課題内容・学期初め・学期末の個人発表及びグループ発表・個人及びグループによる中間発表・ORF（ポスターセッション・トークセッション出展）、学期末10000字レポート課題、毎年ORF開催時期に長谷部研ジャーナルを発行、SBCでの学期内1週間合宿、年2回学期末学外合宿（合宿先でのフィールドワーク＋長谷部ORFの開催）、毎年度末の3月までに各プロジェクト年度報告書の作成に関する運営、毎回の授業後の各回の授業内容に関する議論及び方向性MTG（通称「長谷寺」）、提出課

題・出欠管理をゼミ生と分担制で組織運営を実施。

ゼミの各回の授業内容に関する履修者からの提案を募集し、その内容を教員と執行部でその質の担保のため、徹底的に議論しカリキュラムデザインに落とし込む。

発表に関しては、すべてに対して履修者全員がフィードバックシートでコメントをし、大学院修士課程の中間・期末発表と同様に行い、全員からのフィードバックを発表者は受け取り、次の発表までに改善する、オープンで風通しの良い議論環境の構築。心理的安全性が担保された上での、本音の議論によりお互いの研究の質を高め合うコミュニケーション環境。

1週間合宿・学期末合宿、フィールドワークにおいては、ほとんどにおいて地域の暮らし体験につながる滞在スタイルを徹底するため、食事はすべて全員分の自炊体制で実施。

研究会新規履修希望者の募集に関しては、12月と7月の研究会説明会・研究会授業聴講、学期末最終発表の聴講、選考会（志望動機エッセイと選考プレゼンテーション）で決定する。履修希望者1人に対して、履修者が希望するプロジェクトメンバー及び研究会メンバー全員が出席したうえで、選考会を実施し、全員の合否判定が合意に達するまで議論し、受け入れ態勢を整える。

【開講形態】

4単位取得のA型（週2コマ開講）。研究会開講以来ずっと毎週木曜日3限・4限に開講。履修条件の一つとして木曜日の3限以降は研究会以外の授業を入れないことを周知。これは、毎週木曜日の構成が以下であり、一日がかりだからである。

【開講日の一日の流れ】

- ・1・2限 大学院修士研究会 大学院生＋長谷部
- ・3・4限 研究会正規授業（全員参加）、教員＋ゼミ長＋3名のSA
- ・5限 プロジェクト毎のサブゼミ（全員参加）、教員は個別対応または研究員とのMTG
- ・6・7限 勉強会（有志参加、通常80%ほどの参加率）、教員不在の学生主体の勉強会
- ・7限終了後 任意参加の学生のための食事会（湘南台）

2024年3月に定年退職するまでの直近の10年は毎週木曜日が研究会の授業日で学生は終日研究会関係者と過ごし、木曜日が終わると一週間が終わった認識であった。

【授業日以外の活動日】

金曜日からの週末は、秋田・青森・長野のフィールドワーク先へ長距離バスで1泊または2泊で向かい、公立中学校、高等学校で探究活動などを担当し、週末にかけては、地域の農作業や祭り、市民センターなどでの地域活動に参加。また大学の所在地である藤沢市遠藤・御所見地区では、市

民センターで社会福祉協議会と合同開催の「みんなの食堂」、御所見の2地区における「稲作活動」、体験型農園「フィールドゆう」での農作業、御所見地区での小学生対象の寺子屋活動「学びの庭」、御所見地区の民生委員の皆さんとの地域子ども活動「学びの里」などが多彩に、幅広く企画、運営、開催されていた。また遠藤地区での藤沢市の地域の縁側活動である「もんのきの家」での毎週水曜日の交流活動には、地域の方のご厚意で、13時からの活動の前に、正午から学生たちは、昼食をご一緒させていただき、日常的に、地域の暮らしのリズムに添うように親睦を深めていた。

【卒業研究プロジェクトの指導体制】

- ・ 少人数グループによる卒プロ研究会を別途開講。学期初めの個人研究発表に基づき、担当教員が内容・研究手法・研究形態・思考法に基づいてグループ分けをして、毎週1回2時間ずつのグループ指導を実施。ここでは毎回全員が30分の枠内で事前に発表内容のビデオをメンバーに共有したうえで、教員・メンバー全員からのフィードバック・コメントを受けての議論を行う。通常、Zoomで朝6-8、8-10の時間帯で月曜日-木曜日に卒プロI・II合同で実施。学期中に卒プロIIの4年生対象の直前合宿を実施し、卒プロIの3年生はサポートに入る。
- ・ 卒プロ提出後に学期末合宿で卒プロ発表会を実施。卒プロの他に通常の学期末10000字レポートで、研究会においての自分の成果、今後の展開に関する提言などを自由に論じる。
- ・ 卒プロ内容を、各プロジェクトの研究拠点のフィールドの関係者の皆様に発表、卒プロをお届けする。

以上が、大まかな研究会の在り方のご紹介になります。各プロジェクトの活動内容に関しては、最後にご提示する長谷部研ジャーナル2024年度版をご参照ください。

3. 研究会をとじる、ひとまとまりにつけるといふこと

長谷部葉子研究会の最後の年度の長谷部研ジャーナルから、研究会をとじる際の所感を以下に共有させていただきます。

3.1 終わるー「0→1」を「1→0」に戻すといふことー

長谷部葉子研究会は、2024年度をもって、長谷部葉子の定年退職に伴い、このSFCでの幕を閉じる。2004年の訪問講師としてのご縁から、2007年専任に就任し現在に至るまでの20年間の月日をSFCと共に歩んできた。人間の一生に例えるのなら、ちょうど成人式を迎え、SFCを卒業することになる。現在研究会最後の1年の秋学期を

迎え、研究会在籍者数は40名。20名が3月にSFCを卒業予定で、残りの20名がSFCでの学問を新たな研究会に所属して継続する。

長谷部葉子研究会に関しては、教員学生ともども「卒業」することになる。

慶應義塾SFCという母体の中で、今まで常に「0から1」を作り続けてきた組織が、成長し、熟し、そして今度は「大きな1から0」にもどってゆく。教員・卒業生・在籍生が一斉に一つの組織から「卒業する」という機会は、人生でそうあるものではない。そして学生はみな、この機会を「終わり」と捉えず、「ひとまとまり」と考え、これからは今までみんなで作り上げてきた組織を「古巣」と捉え、組織で培い、己らしく成長した独自の「個」となって、タンポポの綿毛の一つとして、社会や世界に飛び立ってゆく。一人残らず。自らが人生で初めて経験するこの機会は何と面白く、未知の可能性にあふれていることか、その終わりのない、始まりの魅力に最近気がついた。つまり、いったん終わらせることによって、新たな始まりを迎えるということ。そこからまた始まる「0→1」を作る循環。そしてまたいずれはそれを壊し「1→0」に戻す。この緩やかな循環型流動性が、組織の形式にとらわれない、持続可能性を作り出してゆく。その可能性は、計り知れなく、わくわく以外の何ものでもない。

3.2 「一度つないだ手は、離さない」といふこと

矛盾するようだが、自分自身、常に自分にそして学生に言い続けてきたことがある、「一度つないだ手は、離さない」。お互いに手をつなぎ続ける意思がある限り、一度つないだ手は離さない。しかし、そこに固執しすぎて、無理に手をつなぎ続けることは、本意ではない。無理なく手をつなぎ続けられる状態を、意志を持って、対話を持って、共に作り続けること。本質を失わないために、柔軟にカタチを変えてゆく、しっかりと根を張った樹齢を積み重ねてきた大木が、揺るがない幹を持ちながら、四季折々に様々な彩を作り出し、時には目を見張るような変化を見せるように。終わりというひとまとまりを迎えるからこそ、しっかりと大地を踏みしめ、足元を固め、遠くを見据える体力・態勢づくりが何よりも大切だ。冬を迎えようとしている今、その大木はすべての葉を散らし、幹のみの原点に戻る。そして春に向けて新たな命の息吹で大地を、地域、世界を、様々な形で耕すために、新たな存続と繁栄の種を無数に飛ばす。つまり組織は大木の幹であり、まさに今自分たちが置かれている状態が、秋に大いに色づき、できる限りの「自らの美」を極め、そしてすべての葉を落とし、むき出しの幹だけに戻る、組織という大木そのものである。このよう

な拡散ともいえる状態を迎えてなお、一度つないだ手は離さない。これはどういうことか。その答えは、「なぜ終わりを迎えようとしている組織が、終わりに向けて収束するのではなく、穏やかにさらなるご縁をもとに拡散しているのか」に隠されている。今までつないでいた手を、物理的には距離が開き、つなぎとめることができなくなる時がある。その場合は無理につなぎ留めず、手をつないでいた感触の余韻をしっかりと記憶にとどめ、いったんは手を放し、心でつなぐ。そしてまた手をつなぎなおす時を待つ。その一方で新たな手に出会い、新しく手をつなぐのだが、新しい手が加わったことで、物理的に手をつなぎ続けることに無理があり、いったん保留にしておいた手と再び、少し大きな輪となって、手をつなぎなおすことができる。そんなことを過去に何度となく経験して現在に至っている。そしてこれから先もその連鎖、循環は緩やかに、確実に続くことを確信している。だから自信を持って、「一度つないだ手は、離さない」と言い切りたい。

3.3 2024年度のORFのテーマ“Cultivate The Land” ー耕すーとは

「耕す」をこの研究会組織に即して再解釈すると、「持続可能な地域との共創を誰もが理解しやすい形にする」ということ。その上で、「地球の状態と呼吸合わせをしながら、力強く地に根を広げてゆく労働」、このような「耕す」であると解釈している。当研究会は、この「耕す」ことを、研究会という組織が一区切りとなる今は、自分たちをタンポポに例え、「タンポポの綿毛を拡散する」ことであるとも捉えている。

足元に着地する綿毛も、遙か遠方に着地あるいは着水する綿毛もあるだろう。その一つ一つがその新たにたどり着いたところで、根をおろすための「耕す」労働を始める。

つまり、今までこの藤沢の地で、慶應 SFC の下で培ってきた研究会独自の文化(エッセンス)を学内を後にして外に飛びたち、散りばめる、そして新たな土壤に根をおろし、繁殖する土台をつくる。その時期が来た。教育を基盤に、多様で包括的なコミュニケーションを通して、ソーシャルトランスフォーメーションを各地域で、静かに、控えめに、しかし力強く、暮らしの中から、食を通して、心身の隅々までその文化・伝統を吸収しながら、実践してきた。誰がか？もちろん担当教員である長谷部葉子が、そして何よりも研究会に所属する学生の一人一人が自らの判断と意志をもって、自らが向き合うそれぞれの地域の歴史・伝統・文化がその地域の隅々まで浸透した、その地域の「暮らし」「人の縁」に加えていただくことで力強く、地道に実践してきた。ここで改めて思うのは、「耕す」ためには、そも

その耕す土壤をよく理解していなくては、その先、その土壤から新たな豊かさ、繁栄を生み出す宝の土地にたどりつく耕し方はできない。ただ土を掘り起こすのではない。

毎日、地道にその土壤と向き合い、対話し、無理のない対話を続けてゆく、「耕し方」でなければならない。突然に重機を入れて、一気に耕すのでは、表面的には即座に整然と耕された大地に変容するかもしれないが、それは表面的に他の耕作地の一部になったにすぎず、その土壤本来の豊かさを掘り起こし、ほぐし、あぶりだし、活かす「耕す」ではない。最初は手間暇かけ、その土壤を活かそうとする、人間の手で直接「耕す」ことが重要ではないか。一見非効率的で時間がかかるプロセスを経る中で、土壤と耕すものとの対話が生まれ、呼吸合わせが生まれ、日々の労働から、理解と合意が形成される。この基盤が形成されれば、そこからは様々な最新の英知を的確に、無理なく取り入れていくことで、あらたな「合意形成」が生まれ、繁栄と普及、定着が生まれるだろう。その「耕す」プロセスこそが、長谷部葉子研究会で一番力をいれ、ソーシャルトランスフォーメーションという言葉に含めてきた取り組みである。

3.4 ソーシャルトランスフォーメーションー持続可能な 日々の改良ーとは

では、その「ソーシャルトランスフォーメーション」とは何か？様々な解釈があるが、長谷部葉子研究会では、「自らが当事者となり、個人であれ、集団であれ、「今」、「これから」少しでも良い明日を、未来を実現するために、着実にできることを、カタチにしてゆくこと」、その意識と行動が「ソーシャルトランスフォーメーション」の原点であると解釈している。人や環境の条件に依存せず、今手元にあるものを最大限に活かした「何か」を自らの手で、自分たち仲間の手で、どんな小規模な段階であっても、着実に目に見えるカタチを作り、共有し、共感を生み、ともに歩き始める身近な仲間を増やすこと。その繰り返しを人手に委ねず、毎日、1ミリずつ、1センチずつ、その枠組みを広げながら、たゆまずに行い続けること。これが「地域」を、抽象的に言えば「社会」をより良い方向に無理なく移行させてゆくプロセスであると考えて、日々活動している。この前提には、自らが参加させていただくコミュニティへの、その日常的に営まれている文化への敬意の念に基づいた発言・行動がある。そしてそこに存在し、一員として何かを成し遂げたい、あるいは一員であり続けたいと思うのであれば、一員であるための覚悟としての「自分の意志」と「自分の判断軸」を持ち、相手に誠実にそれらを伝え、また同様に相手の意志と判断軸を理解し、その「文化軸」を中心とした妥協のないコミュニケーションと合意形成を

積み重ねてゆくことが何より重要で、すべての始まりの一步となる。ここで当たり前のように「文化軸」と述べたが、この「文化」とは、様々な特色や規模の存続する集団、組織において、その共同体の維持・存続のために、それぞれの構成員によって年月をかけて、日常的に暮らしの中から醸成され、蓄積され、維持されてきたもの。それらは独自の知恵、価値観、空気のように当たり前の認識・行為であり、その共同体における「教養」ともいえるものだと解釈している。そしてさらに大切なのは、その「文化」といえるものが、その本質の失ってはならない核を共同体の隅々まで浸透させ、無理のないカタチで持続可能な「空気」のような存在になるのには、構成員の各々の意志と情熱、他者との協働の精神、相互理解・合意形成のための十分なコミュニケーションが日常的に行われる環境を意識的に作り続ける忍耐強い取り組みが欠かせない。このプロセスを経て、初めて独自の「文化」が作り上げられるのではないだろうか。

3.5 「文化がある、文化をつくる」ということ

異言語・異文化理解、異言語・異文化間コミュニケーションを専門とする身として、今改めてここで共有したい。文化とは実に多様性に富んだ、変化をいとわない柔軟さとダイヤモンドのような硬さを兼ね備えたものではないだろうか。国・地域様々な単位で文化は存在する。それは言うまでもないが、実はもっと小さな単位、とても身近な家族やきわめて個人的な人間関係にも、そして個人そのものにも「文化」が存在しているということが見過ごされがちである。偶然に電車で、大学の教室で隣り合わせになった人とも、異文化間コミュニケーションが始まる。どんな身近な存在でも異なると当たり前、だからこそ、知り合うことに大きな価値があり、知り合い、分かち合い、協働し、共存し、共感が生まれる。その息の長い、丁寧なプロセスこそが、異なる文化から、新たな文化が生まれる基盤となる。この新たな「文化」の持続可能性は、その共同体を構成する一人一人の意志と認識と行動にかかっている。今ここで、個人としての勇気を持ち、自分の判断で、自分の意志と情熱、責任を持って今まで皆で築き上げてきた文化を更新して、持続していく、その大きな一步を踏み出すことを、今までかかわってくださった学生を含むすべての人に声を大にして呼びかけ、それを以て現在に至るまでの心からの感謝としたい。何よりも長谷部葉子自身が、今までに共に築き上げてきた一つ一つの文化を更新して、それぞれの独自性を尊重しながら、それぞれが大粒の真珠のネックレスのようにつながり合う、新たな文化を慶應義塾の内外、日本国内外の様々なご縁から共に作り出す、その強い意志を

持って、慶應義塾を卒業します。(以下省略 2024 年 11 月 19 日 長谷部研ジャーナルより抜粋)

4. 研究会を閉じて 1 年、醸成してきた「研究会文化」は消滅したか

長くなり恐縮ですが、上記のメッセージを地域の研究会関係者、卒業生、研究会生に共有し、2025 年 3 月をもって、研究会は解散しました。そして 2025 年度の 1 年間はどのような変化を遂げたのか、ご報告させてください。色々と思えば、コミュニケーションの多い、多様性の狭間で全員で妥協なく切磋琢磨してきた記憶が多く、その結果、この 1 年、地域と卒業生・在学生の意志で、すべてのプロジェクト活動が持続可能なカタチに枠組みと内容を変えて、存続しています。社会人になった卒業生も、担当教員が新天地の岡山に、岡山理科大学でご縁をいただいて移住したことで、後輩のサポート・指導の立場を担って、週末・有休を活用して途切れることなく参加し、地域の関係者の皆さんの持続的な関係性が途絶えるのではないかという不安を払拭することに尽力しました。慶應義塾での新たな研究会の後輩は生まれませんが、担当教員が新たに立ち上げた岡山理科大学での長谷部葉子ゼミを後輩として新たに迎えるべく、研究会の三田会を立ち上げました。2025 年度で卒業プロジェクトを新たな研究会に移して、ご指導いただいた後輩たちのために、今まで通り、この 1 年を振り返る、まるで研究会開催前と全く変わらない、ORF で実施していたトークセッションや卒業生の発表企画がある、研究会合宿を仙台で企画し、35 名ほどの有志が集まりました。「一度つないだ手は離さない」関係性のサステナビリティを何より大切に柔軟なゴールを目指し続けた、皆との 20 年間、関係者の皆様とのつながりの手ごたえを確かに感じることでできた 1 年でした。SFC であったからこそ、与えられた厳しさと自由、そして喜び。終わることのない未来を見据えた文化の醸成。すべてのことに感謝しかありません。SFC ジャーナルでこのように自由に述べさせていただくことがこの場に適しているかどうか懸念はあります。しかし、SFC で他のすべての研究会、そして長谷部葉子研究会が研究会独自の判断と基準で作りに上げてきた研究会文化は、何よりも誇りに思える、学生一人一人の尊厳を第一に据えた、「生き抜くちから、今日よりもより良い明日の国造りの力」であると考えます。

この研究会文化が学問の中核をなすものであり、この慶應義塾の「研究会文化」の価値を「大学」という教育・研究機関に国内外を問わず普及させていくことをここにお約束します。

謝辞

今回この原稿を書くにあたって様々なご理解とご協力を忍耐強くしてくださった SFC ジャーナル編集部の田坂真美さんに心より感謝申し上げます。また、まだ在籍中の元長谷部葉子研究会の学生を暖かくお引き受けくださり、ご指導くださっている新たな研究会の先生方、どうもありがとうございます。これからも引き続きどうぞよろしくお願いいたします。長谷部研が解散した今も、変わらぬご理解とご縁をつづけてくださっている、各プロジェクトの地域の皆様に深く御礼申し上げます。今まで長谷部葉子研究会に所属してくれた、すべての元長谷部研生全員に、皆さんの強い志に根差した今までのすべてのご縁を継続しようとする、推進力と人を大切に思う心、皆さんの存在は教員として大きな生きる力であり、誇りです。皆さんの大きな協力、サポートする力、人間力なしには、この研究会文化は存在しえないものです。ありがとうございます。

参考資料

2025 年 3 月に慶應義塾での長谷部葉子研究会が幕を閉じ、その後長谷部研生それぞれの道が開かれた 2026 年度、新たにみんなの努力と尽力により、長谷部葉子研究会三田会が発足し、5 月 10 日(日曜日)に三田キャンパスで第一回三田会を開催しました。それに先駆けて、三田会長谷部研ジャーナル創刊号が発行されました。半学半教の姿勢を貫いて、現在までを共に歩んできた、世代を超えた卒業生が作り上げたものを皆さんに共有し、解散後研究会の文化がどのように新生三田会に継承されて行こうとしているか、三田会長谷部研ジャーナル創刊号でご確認いただければ幸いです。

<https://drive.google.com/file/d/1yUwIFTIBjJxxJl5VpCXQu0ZQBx8k9tv3/view>

長谷部研ジャーナル 2024 年度版

https://drive.google.com/file/d/1frnvV1BpnwSwL7NKk6c9cL_BQE7K5Xzl/view



〔受付日 2026. 5. 15〕

